

自由の鐘ぞ なりひびく。

旧古里村下星谷に生まれ、明治末期から昭和にかけて、筑波野の詩人として活躍した下条綾子。故郷をこよなく愛した彼女の人生を紹介します。

女流詩人

下条 綾子 あや

下条 綾子は、明治37年（1904年）に真壁郡古里村下星谷（現在の筑西市下星谷）に6人兄妹の末娘として生まれました。

下条家は旧家で地主でもあり、父の泰次氏は村長を歴任しました。長兄の豊氏（元下館市長・下条正雄氏の父）は、大正9年に下館市薬師町に下条産婦人科病院を開業しています。



両親は、教育熱心で特に末娘に対する愛情に格別なものがあり、綾子もまたこれに応えようと思いました。綾子は当時の医学専門学校に合格するほどの学力がありましたが、文学好きが高じ、16歳の頃から創作活動が始まったと言われています。

古里小学校から日本女子商業学校本科に学び、この当時としては珍しく、

日本女子大学まで進学しています。

横瀬夜雨ら著名な詩人たちとも交流

大正11年、慣れない大卒での寮生活から肋膜炎を患い、生家に戻り療養生活に入ります。この時期、茨城では横瀬夜雨や山村暮鳥たちが、文芸雑誌『郷土』を出版しますが、これに綾子は投稿し、注

目されるようになります。また、中央詩壇で活躍する詩人とも交流を深めていきます。『桂冠詩人』を主宰する梶浦正之や「人生劇場」や「人生の並木路」を作詞した佐藤惣之助の『詩之家』などにも投稿し高い評価を受けます。そして、24歳のときに、詩集『筑波野の春』を出版し、本格的な詩壇デビューを果たします。

故郷・古里中学校の校歌を作詞

昭和7年12月、下妻市出身で弁護士の高貝栄一郎氏と結婚します。栄一郎氏は、東京大学法科の卒業で後の衆議院議員赤城宗徳氏（筑西市名誉市民）と同期でした。東京に居を構え一男一女をもうけますが、昭和19年、太平洋戦争が激しくなり、家族で実家の下条家に疎開します。

昭和23年、地元では古里中学校が新しい教育制度のもと創立しました。当時、大学を卒業と同時に古里中学校の教員になった、稲川勘助さん（元筑西市選挙管理委員長）は、将来の担い手となる中学生に夢と希望と誇りを与えてやりたいと、疎開中の綾子に校歌の作詞を依頼したときのことを回想してくれました。「できあがった歌詞は、優美で希望に満ちたすば



茨城女子短期大学

小野 孝尚 学長

教育の歴史や茨城の近代文学を研究。著書に『茨城の近代詩人群像』、『豊田英雄～人格高き女子を造れ～』など

今も色あせることのない、紡ぎだされた言葉の魅力に触れていただきたい

下条綾子は18歳のときに、胸部疾患で療養生活を余儀なくされました。このことが彼女の詩の創作に大きな影響を与えています。

彼女の作品には、病む者の心の中に見え隠れする虚無感や青春を生きる苦悩、熱い思い、自由へのあこがれなどが

学校に統合されたため歌われていませんが、古里中学出身の同窓生には若き月日への追憶として今でも校歌の合唱が繰り返されています」と稲川さん。当時、女性詩人による校歌の作詞は非常に珍

らしいものでした。作曲は下館一高の音楽担当の滝豊先生にお願いしました。お二人のご好意により昭和24年に校歌が完成し、全校生徒と職員が大喜びしたことをよく覚えています。現在は協和中

しいものでした。

いつまでも「をとめの心」は失わす

昭和20年に、夫の栄一郎氏が胸を患い亡くなります。昭和25年に住まいを下妻市に移し、戦後の

古里中学校校歌

作詞 下条綾子
作曲 滝豊

青く澄みたる大空に
浮かぶ錦の春かすみ
筑波の山にかかるとき
野辺に愛しきすみれ咲く

尽きせぬ人の世の幸を
求めて学ぶ筑波野に
その名ゆかしも古里と
誰が名つけん我が故郷

久遠の思い胸にして
愛と誠の道求め

いつか織るべき唐錦
自由の鐘ぞなりひびく

類まれな才能に恵ま

れ、女流詩人として活躍した彼女の作品に、ぜひ触れてください。

正しき歴史つくるべく
遠き理想をおもうべく
希望の光新しき
学びの道にいそしまん

企画展

筑波野の女流詩人・下条綾子展

- 期間＝1月8日(火)～23日(水)
午前9時～午後7時
※21日(月)休館
- 場所＝中央図書館・エントランス
ギャラリー



講演会

「女流詩人・下条綾子の生涯」

講師：茨城女子短期大学 小野孝尚 学長

- 日時＝1月13日(日) 午後1時30分～
(開場：午後1時～)
- 場所＝中央図書館・視聴覚室

入場無料
申込み不要

【問い合わせ】広報広聴課 ☎24-2172

混乱期に二人の子どもの教育のために、下妻二高の図書館司書として働きます。

仕事と子育てに追われ、詩壇からは徐々に距離を置くようになりますが、晩年まで交流のあった版画家の飯野農夫也氏(現筑西市上平塚生まれ・平成18年没)に送ったハガキには「今は二子を抱いて生活苦に喘ぎつつもロマンチストとしての夢想家」と書かれており、いつまでも「夢見る女性」として、創作への意欲を失わない彼女の思いが伝わってくるようです。

昭和38年、書き溜めた多くの作品を残し、筑波野の詩人は59歳でその生涯を閉じました。

没後55年を記念して、下条綾子の企画展を開催します。詩作だけではなく短歌や小説など豊かな感性で紡ぎだす、その言葉に込められた思いや作品の魅力にぜひ触れてください。

(本文中敬称略)